

郡部 一、四六二柱、

県外 (滋賀・京都・福井・奈良・東京・埼

玉・神奈川・愛知・大阪・広島・福

岡・長崎・その他)

八三八柱。

\*嵐・槍両兵団の部隊有志を中心とした方々が激戦地衡陽市廻雁峯に、時計台(太陽電気)を、戦後四十年を記念して建立されている。

日中両国の末永い友好親善を願う証であり、日中両軍戦没者に対する慰霊の精一杯の気持ちであると「一三三三会報」に掲載されている。

(会報は三重県津市萩原祐氏より社団法人・軍短協会に送付された。紙面を借りて謝意を表します。

星澤 実)

### 白虎部隊従軍記 (中支戦線)

福島県 若林

保

歩兵第六十五連隊歌

一、維新の華と謳われし

白虎隊士の熱血を

享けし誉の武士が

今決然と膺懲の

正義の戦進め行く

白虎その名ぞ我が部隊

二、輝く御旗さきがけて

上海江陰南京も

鎧袖一触大和魂

徐州大別死を越えて

曠野を圧す勝鬨譜

白虎その名ぞ我が部隊

三、転戦山河幾千里

征くや囊東また宜昌

栄えの感状幾度ぞ

軍旗に香る勲功は

御稜威と俱に輝やかん

白虎その名ぞ我が部隊

四、噫呼この勲功受け継ぎて

御詔勅畏しこみつ

豪氣放胆武を磨き

気魄を練りてうち建てん

大東洋の新秩序

白虎その名ぞ我が部隊

私は昭和十七年十二月一日、会津若松市の東部第二十四部隊第七中隊へ、現役徴集兵として入隊しました。入隊後は、三種混合接種、駈足訓練とかで過ごし、十二月十三日屯営出発、会津若松駅より列車輸送で鏡戸をしめたままで、二三日を要して下関駅より乗船、約八時間位で釜山へ上陸、再び列車輸送（無蓋貨車）により京城、奉天、山海関（ここより戦地加算がつく）を経て浦口へ到着。

南京にて便船待機。約一週間して再び乗船、揚子江を遡り、江西省湖口へ上陸、湖北省沙洋鎮まで行軍をした。

昭和十八年一月十日、第四十五次補充員として第十三師団第六十五連隊第二大隊第七中隊（鏡六八〇五部隊）

連隊長 桜井 徳太郎

中隊長 熊谷 健 弥

教官 越智 慎 吾

の隊へ配属され、武功輝く伝統を誇る白虎部隊の健児となりました。

さて、私の入隊した昭和十七年十二月の私の家庭の状況、家族構成は左記の通りでした。

祖父 健在 農業

祖母 〃 〃

父 〃 〃

母 〃 〃

姉一人 〃 他家へ嫁入り

弟三人 〃 〃

妹一人　　〃

の一〇人（実員九人）の地主の農家でした。

農業は稲作が主で

田　　二町二反歩

畑　　一町五反歩

貸田　一町五反歩

計　　五町二反歩

という状況です。

家族と職業を擲つて兵役に入り、後に不安は無いといえは嘘になりますが、時局がら（祝入営　若林　保君）と大書した幟を押し立て、郷土の皆様は歓呼の声に送られることは、男児の本懐であり、勇躍して入営しました。

戦地において初年兵の教育を受け、一期の検閲も無事終わり、その間、各地の作戦に出動した部隊を転々と追及して沙市、涇市、老城等へと移動しました。第一小隊分哨一三名全員戦死、その他小さい損害も区々に生じたが、間もなく一選抜上等兵に入るという幸運に恵まれ、希望に燃えて毎日の軍務に精励しました。

ところが好事魔多しとか、思いもかけず悪性の下痢病と熱帯熱に冒されて、その上、古年兵から前歯を折る等の暴行制裁を受け、苦しく悲しく辛い地獄の日夜を送り、遂には自殺を思いたつこと二回に及びました。本当に今日その当時の状態を思い起こしても、よくぞ辛抱して頑張ったものだと自分が自分を誉めてやりたい位悲惨なことでした。

勿論その時には、先輩の軍曹さんが私の行動を怪しんで、「おい、若林！、お前どんなに苦しくても、自殺なんか思うなよ。揚子江のような大きい心を持って最後まで頑張れ！」と励ましてくれたお蔭もありました。

その内に病気も治り、健康も取り戻して元気で毎日多くの戦友と共に中支戦線を長駆し、湘桂作戦という桧舞台に移ることになります。

昭和十九年五月二十七日、江南の警備地を名古屋の部隊と交替して、十一年式軽機関銃を金沢上等兵とコンビで行軍。

沙洋鎮―応城―孝感―漢口―武昌―咸寧―通山

……。

続々と四列縦隊での行進は眠いことこの上なし。この作戦は大陸打通作戦と呼び国運を賭けた大遠征戦であつた。

武漢―長沙―衡陽―桂林―柳州―独山と実に、一四〇〇キロ余の長大距離をただ足だけで突破して行こうという古今未曾有の難作戦である。連日の雨で編上靴の半張も取れ、何日も靴は履いたままで足はかゆい。雨で白くフヤケル。その中にやっと晴れ上がり好天気となる。

一七里余りブツ通しで接敵のため急進したので疲れは大きい。急迫して敵の最後尾の患者輸送隊と入り混じった日本軍のあまりの早さに、追い付かれた敵の担架隊は路上に患者を放棄して逃走する。その敵に密着して上栗市へ入る。

町民の歓迎、茶を接待してくれたことには驚いたし、また同時に、住民が日本兵だったことが解つた時の驚きと狼狽さは実に言語に絶したことだろう。アツという間に、それこそアツという間に四散してしまつた。

丁度、饅頭に蠅が真黒にたかり、人がそばへ行つたら「ワーン」と散つてしまつたように。何十日振りに大休止出来るのか（実は二週間位行軍した）よかつたと思ひ、民家の土間に糞を敷き、今日は横になつて眠れるか。所が大内分隊分哨勤務の命令、所定の位置で一服したら出発準備命令、出発、これでは今夜も靴は脱げない、五月とはいえまだ寒い、胴振いは止まらない。

長沙の敵は頑強に抵抗している。まだ落城したとの話もない。それでも我々は恐怖も不安もない。ただ黙々と前の人の足跡通り寸分の違いなく、眠いのを我慢してつて行くだけ。この夜行軍ほど疲れれるものはない。前の人の足跡通り足を運ばないとつまづくか。滑つて転ぶか解つたものではない。

まして山中に入れば前の人の頭の動き方で足跡をたどつて行かなくてはならない。

ともすると、真の闇に入つてしまうと、眼を開いても閉じていても何も見えないことがある。連日連夜（一週間以上睡眠をとらないと）行軍中眠っているのか、

眼を開いているのか解らないことが多い。そんな時、前の人が止まっていたりしても後から行って必ず前の人の鉄帽に「ドカン」「この野郎。眠っていたな」「いや眠っていません」。大抵は初年兵が多い……といった理由にならない。敵と遭遇したらしい。

本来なら道端で腰ぐらい下して休憩というところ、道路のぬかるみがひどく靴が二寸程沈んでとても休めない。どこを見ても皆泥んこ。暗さは暗し。右は見上げるような山肌、左は断崖のようだ。軽機関銃をついて立って前進を待つほかはない。

どうしても眠い。ガクリ、ガクリと身体もろとも断崖の方に半歩、あるいは一歩行ってしまふ。どうしても駄目だ。早く前進しないか、実に冷水三斗とはこのこと。また、少し過ぎるとガクリ、またガクリ、背のうは重いし、息がつまりそう。

尖兵は敵にぶつかつたらしく重・軽機、手榴弾の音がする。それでも辛うじて夜明け、どれほどこの夜明けを待ったことだろう。敵見えず前進、前進。ようやく前夜尖兵の通つた山を下る。しばらく振りでそれで

も今日は大休止の命令が出た。

その前、六月八日。

連日篠をつくような雨、外被(雨合羽)もずぶ濡れ、携帯食糧(乾パン、塩、味噌)まで、背のうの中でベツトリ。対岸の望楼からの敵の射撃で渡河出来ない。

勿論、連日の雨で水深は肩あたりまであつて流れが急でとても前進は出来ない。とにかく背のうを民家にかためて軽機をかつき、弾薬をかきつけて川に入る。

対岸を窺うと迫撃砲と重機をにないつけての頑強な布陣で、とてもこの分では今夜は渡河出来ない。

また、背のうのある民家に戻る。そして兵器の手入れ、そして朝食、仮眠。今夜こそはと……同じ状況で後方よりの援護射撃もない朝一時頃また民家に戻る。所が誰がみつけたか蜜蜂の巣があつた。直径一尺七、八寸、長さ二尺五寸位の桶の中に飼っていたのである。皆で叩き落し、巢をむさぼり食いかすを吐き出した。渋いけれども久しく食べていない甘味は、また何ともいえなかつた。

やっと雨も上がり、工兵隊が今朝暗いうちに太い口

ーブを対岸までつけて置いてくれた決死的だったろう。早朝の敵前渡河である。重機の援護射撃と同時に渡河前進、水深はそれでも胸までは充分。まだ、敵からは河には大した弾も打ち込まれていない。まだ発見されないのであろうか。双胴の飛行機が三機、頭上を飛んでいった。幸いまだ戻ってこない。

無事対岸に取付き、川からはい上がるには防水してあるズボンから水が抜けない。抜いているヒマがない。

「ガボ、ガボ」「シュー、シュー」重くて歩けない。この態では前進は困難。敵は数名しかない。

チェコ機銃、小銃三丁ばかりの戦利品、随分骨を折った。敵は前夜あたり主力は撤退したものと思われる。

第二小隊の藤田博君（第五十二次、須賀川出身）は急流に抗し切れず犠牲となった。合掌。

ところがこれからが大変だった。連日の雨と二日にわたる冷え込みで身体が思うようにきかない。それでも今度は連隊の最後のため、デレデレとついて行っただけは休憩、また進み、歩いては休憩、ただし道路上に寝る。いやこの時の身体のだるさはどうだろう。下痢は

する、眠い、足が痛む、何を考え、何をやっているのかと思うことなど論外、本当に死の直前の感あり。倒れるまで歩くことは勿論だが、道端にゴロリと寝込んで口をあけたままだ。口の回りに蠅がたかって蠅を追うどころか、口を締める力までなくなっている。

在支足掛五年、この時ほど参った、と思ったことはなかった。明日まで浮遊病のごとく二〇分位小刻みに行軍する。その時間がそして距離が六里にも七里にも思われた。せいぜい一キロ位だったろう。

それでも明け方まで何とか命を持ちこたえた。

後で昭和十九年六月頃（中旬）私が白い着物を着て病院に寝ていたところ、ハッキリと母は夢をみたという語り草もあり何ともいえない思いがした。

戦友金沢上等兵（第四十一次、石川郡出身）と復員後、戦友会の中で話が出て、この辺は私は記憶が全然なかったことを話している。

#### 金魚石の戦闘

六月十六日、金魚石にたどりつき、前記の大休止。金魚石は緑江の流れに臨んだ小部落。敵影はなく二〇

数名の現地住民が残っていた。

家を探し、先ず飯を炊き、支那酒を見つけ、菓を敷きやつと軽機の分解手入れを終わり、フンドシ一丁で乾盃、死んだようになって寝た。

翌朝四時頃、湘東に通ずる本道上の銃前哨（佐藤一布上等兵、四十一次）が敵十一軍の精鋭四〇〇〇名に襲いかかられる。「非常」「非常」の声（彼は立哨中）。その声の終わらぬうちに、屋根といわず天井といわず、バラバラ、ヒューンヒューン、破片やら灰がバラバラ落ちてくる。歩哨の手榴弾によつて敵の侵入は一時おさえられる。はだしのまま軽機をとり出し武装を整える。間もなく夜明けになった。同時に前回の第二小隊分哨長

（中屋軍曹）のいる小高い山（七名いる）に、薄暗い夜明けをついて、背のうを背負つた中国兵がなだらかな斜面を駈足で突撃していく。「ソレー」と夜舎前から対空射撃よろしく、私が軽機の脚となり十一年式はかけ上がる敵兵めがけて射つた。射つた。

まだ薄明かりでよく判らないが、ウンカのようにか

け上がつてゆく敵兵、夜は完全に明けて行く。分哨は取られた。戦友はどうしたろう。射ち合う音もないし、これはシマッタと思つた。

二大隊の重機の援護射撃により低いサザン花の林をじわじわ登はん、敵前一〇メートル位まで肉薄、会田好二小隊長

（岩瀬郡白方村出身）の「突撃に」の合図で援護射撃中止。同時に「突つ込め、ウワー、ウワー」に敵は二、三名の遺棄死体を残して敗走した。手榴弾（柄付き）二箱位残し後は何もなし。

一旦全員下山、既に第二小隊の位置に指揮班進出し第一小隊への側面射撃、距離五〇〇メートル銃眼からの応戦中。しかしながら潮のごとく登つて行く敵を阻止出来ず、第一小隊は支離滅裂、高橋金一兵長（第四十一次、松川出身）は部下五名を指揮して敵と手榴弾戦を果敢に演じ、全員（一個分隊）壮烈なる戦死をとぐ（後、軍司令官感状と二階級特進の勲功を受けた）。

敵は山頂攻撃は死にもの狂いで攻防。我が第二小隊は第二重機の援護射撃のもと渡辺正喜軍曹の連絡係下

士官と急きよ登はんを開始。

第一小隊連絡係下士官腹部貫通（即死）、星隆、戦友梅田某その他数人戦死。第一小隊は完全に戦闘力なし。

（無傷四―五人）。野戦病院へ戦傷者を運ぶ。実に惨憺たる敗戦であった。

第三小隊では第一小隊の負傷者を下山させるとき敵と誤認されて擲弾筒を発射して一名を即死させてしまった。

第二小隊応援攻撃、重機その他で敵は退散。敵の遺棄死体一〇〇名余。その凹地こちらの藪に死体累々のどから吹き出す血で呼吸困難な者、「グボ」「グボ」と断末魔の者、苦痛でうなっている者数知れず。

第一小隊は死体の引下げ（友軍の）や死体の処置で大変。第二小隊は第一小隊の後を引継ぎ警戒にあたる。実に無気味なものである。血生臭い風と火薬の臭気が鼻をつく。兵のみでなく将校の死体もかなりある。

どれだけここで激戦が展開されたか想像に余りある。敵は第二分哨にサジを投げ、第一小隊分哨を確保

する戦法に出たわけである。

この高地を占めれば完全に中隊は制圧される運命となる所であった。

大苦戦の原因は、前進前進で敵状が判明出来なかったこと。約二キロ前に敵の団本部（連隊本部）があったこと。その前に何の防御態勢もなく布陣したことが悔やまれる。

しかも第一小隊は山の中に位置していたこと、敵が攻撃して頭上を占められて頭から手榴弾を投げられてはたまらない。こちらは遮蔽物無しどんどん負傷する。そこで高橋兵長の山上攻撃の悲壮な戦いとなってしまった。

第一小隊長負傷、以下多数戦死、戦傷で戦力がなくなり、小野軍曹第一小隊長となる。

（以上第七中隊誌より抜粋、借用）

最後に私の負傷のことを簡単にお話しをします。

時はもう終戦も間近い昭和二十年七月十九日です。

所は広西省桂林付近の五旗嶺。

我が第六十五連隊は七月十七日、桂林―興安―白沙



舗に向い転進中、軍公路の西側を南北に連なる五旗嶺の山岳に陣どり、我が軍の撤退を阻止せんとする敵は先に連隊から転属した沖天部隊を襲撃していた。それに連隊が合体し敵と交戦する。この山頂に布陣する有力な敵は峻嶮をほこる岩山を利用して頑強に抵抗しているために、攻撃は思うように進展しない。したがって暗夜を利用して突撃を繰り返すよりほかなかつた。

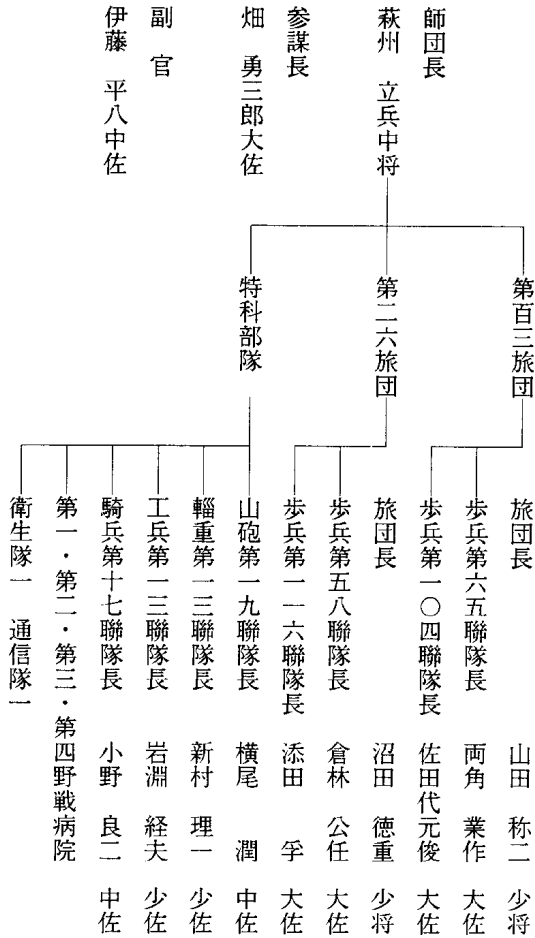
私は軽機の射手として戦闘中、敵弾により右大腿部軟部貫通銃創を負い、戦友に担送され、トラックで後送され、看護婦もない川原の砂原の野戦病院に収容された。まさにこの世の生地獄のままの病院とは名ばかりの所で、手榴弾により自決していく傷病兵も多く、官物私物の盗難は激しく、軍紀風紀も通用せず、加えてアメリカ空軍の空襲には何一つなすすべもない。

ただ、もう自分だけ何とかして生きのびたい欲望にかられて、今から考えると一体自分は どうして生還出来たのか、思うに父母の強い祈りによる神仏のお加護であつたらうと感謝あるのみです。

戦後すでに五〇年に近く、祖国は世界に冠たる経済

大国として復興をなしとげ、日中友好親善を深めております。私共支那大陸に出征した軍人として誠に感無量であり、願わくば今後とも祖国日本の、そして戦争を知らぬ子や孫が、まさに世界人類の幸せを祈って、このことに貢献し、世界の各民族より敬愛される日本の国、日本人になるよう努力して貰いたいとお願いをして、終わりとします。

# 第十三師團編成表 (編成時)



# 歩兵第六十五聯隊補充状況

補充年時	年月日	場所	聯隊への人員	摘要
編成	昭和12・9・18	若松	三、六九五名	将校・下士官・兵
一次		大阪	五五名	将校・下士官・兵
二次	昭和12・10・26	上海	四三三名	将校・下士官・兵
三次	12・5	江陰	三七四名	将校・下士官・兵
四次	12・17	南京	四二七名	下士官・兵
五次	13・1・3	全椒	三七〇名	兵
六次	13・5・29	蒙城	九五名	兵
七次	6・22	寿县	四名	兵
八次	7・18	寿县	四名	輜重兵
九次	7・19	廬州	二六名	将校・下士官・兵
十次	9・18	廬州	二名	将校
十一次	10・10	新店	八〇名	下士官・兵
十二次	11・8	金山	一五名	将校
十三次	14・1・2	新州	一、〇三九名	将校・下士官・兵
十四次	1・4	新州	五名	衛生兵

補充年時	年月日	場所	聯隊への人員	摘要
十五次	5・25	安陸	一二名	見習士官
十六次	6・8	旧口鎮	七名	将校・下士官・兵
十七次	6・18	旧口鎮	二名	見習士官
十八次	7・2	旧口鎮	六四名	輜重兵
十九次	8・29	旧口鎮(漢川)	九八〇名	下士官・兵 13年徴集現役
二十次	10・14	旧口鎮	一四九名	輜重兵
二十一次	12・10	旧口鎮	三五〇名	下士官・兵
二十二次	15・1・31	旧口鎮	一名	軍医
二十三次	2・5	旧口鎮	一三名	将校
二十四次	2・10	旧口鎮(漢川)	八名	将校
二十五次	4・10	旧口鎮(安陸)	一、五三六名	下士官・兵 14年徴集現役兵及び補充兵
二十六次	8・12	滝泉舗	二四六名	将校・下士官・兵
二十七次	8・13	滝泉舗	一七名	見習士官
二十八次	9・6	滝泉舗	四一名	下士官・兵
二十九次	10・4	滝泉舗	二九名	将校・下士官・兵
三十次	10・27	滝泉舗	九名	下士官・兵
三十一次	12・23	双連寺	三九九名	准士官・下士官・兵

補充年時	年月日	場所	聯隊への人員	摘要
三十二次	16・2・4	双連寺	一〇三名	下士官・兵
三十三次	3・7	双連寺	四二名	下士官・兵
三十四次	4・28	双連寺	八七一名	下士官・兵 15年徴集現役兵
三十五次	5・22	双連寺	四〇名	輜重兵
三十六次	8・23	双連寺	二四名	下士官・兵
三十七次	9・10	双連寺	五名	見習士官
三十八次	10・18	鴉鵠嶺	二五二名	下士官・兵
三十九次	12・31	鴉鵠嶺	一三名	将校
四十次	17・1・12	鴉鵠嶺	二一九名	下士官・兵
四十一次	4・4	紫金山嶺	九二九名	将校・下士官・兵 16年徴集現役兵
四十二次	7・21	紫金山嶺	六名	将校
四十三次	8・27	紫金山嶺	一一〇名	下士官・兵
四十四次	9・15	紫金山嶺	四一〇名	下士官・兵
四十五次	18・1・10	沙市	八一一名	下士官・兵 17年徴集現役兵
四十六次	7・13	臼湖堤(黄金口)	七〇〇名	将校・下士官・兵
四十七次	9・10	臼湖堤(黄金口)	二〇名	下士官・兵
四十八次	19・1・8	臼湖堤(黄金口)	一六六名	下士官・兵

補充年時	年月日	場所	聯隊への人員	摘要
四十九次	2・13	料湖堤(黄金口)	八八一名	下士官・兵 18年徴集現役兵
五十次	7・29	衡陽	三二六名	下士官・兵
五十一次	12・20	全	一、六七八名	将校・下士官・兵
五十二次	20・1・15	六	五六五名	将校・下士官・兵 18年徴集現役兵
五十三次	7・28	全	四四七名	下士官・兵